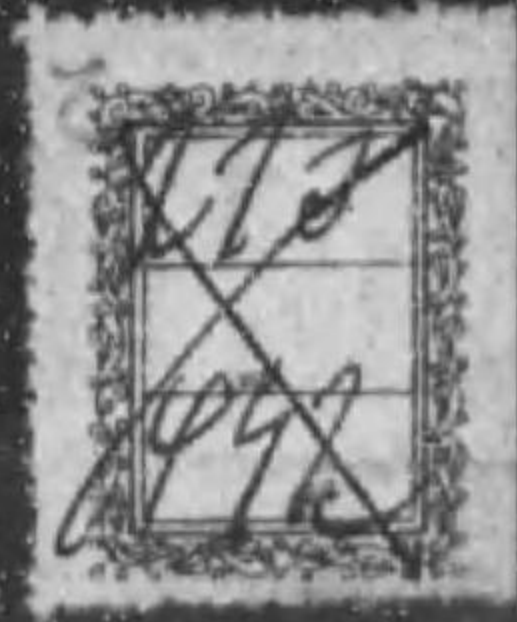


特116

703

七騎落
弱法師
絵上

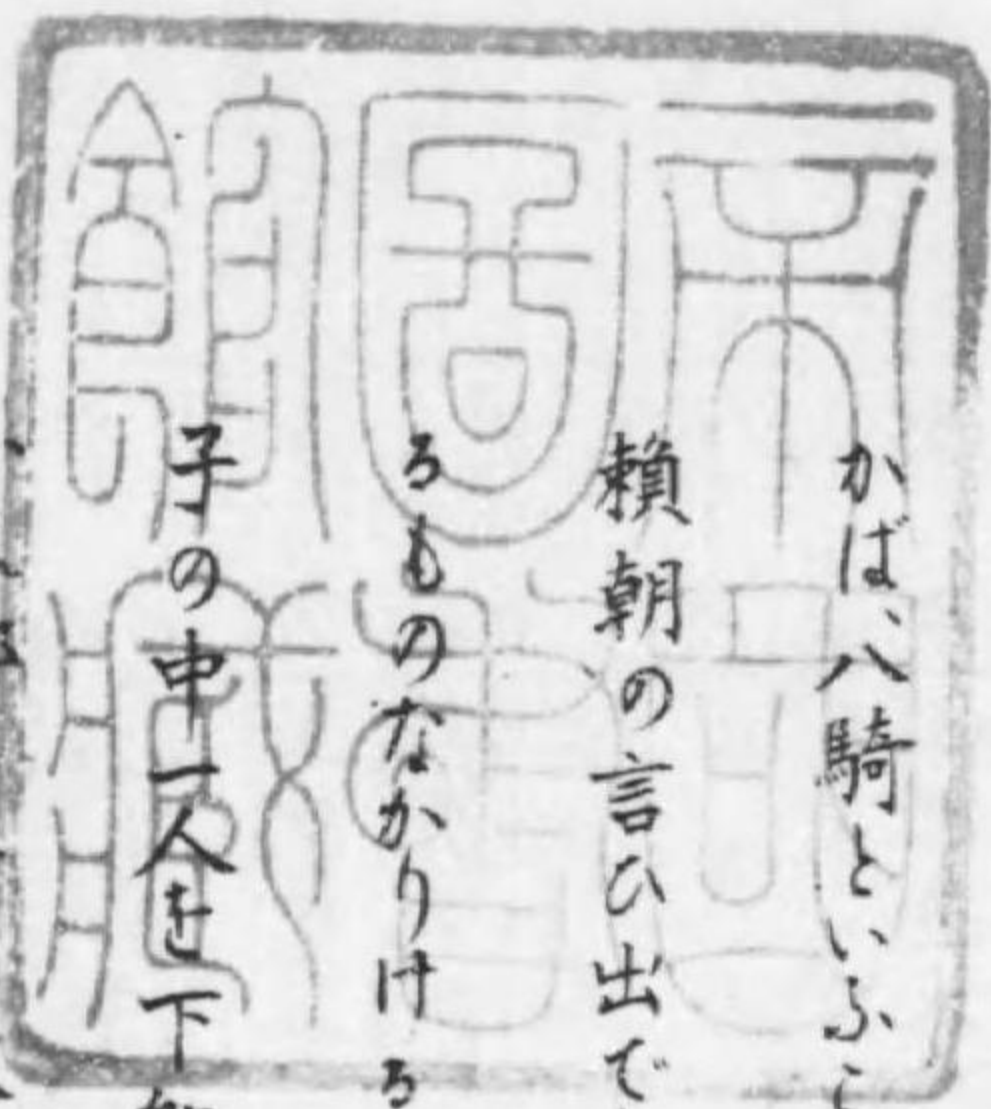


始



白宗不家
觀十世
心之印

特 116
703



七騎落

概説

外十三卷ノ一

石橋山の戦敗れて頼朝は安房の方へ落ち行かんとしける時、一行は八騎なりしかば、八騎といふことは源氏に取りて不吉の例なりとて其の中の一人を船より下せと頼朝の言ひ出でしより、誰か彼かを選びも、いづれも主君と命を共にせんと應ずるものなかりけるに、土肥實平は其の子遠平と共に父子二人在船しけるを以て、父子の申一人を下船せしむることとなり、遂に遠平を去らめたるが、其後遠平は和田小太郎の手に救はれて、頼朝に忠勤を抽でけり。

大正
10. 8. 15
内交



此曲確カリ強メニ謡フト虫モ心持緩急少ナカラズ心スベシ
小書 恐之舞

ワ	ツ	子	ツ	ツ	シ	ツ	役別
和田義盛	岡崎義實	土肥遠平	土佐房	新開次郎 土屋三郎 田代某	土肥實平	源賴朝	
梨子打鳥帽子 弓矢持	梨子打鳥帽子 扇指 弓矢持	梨子打鳥帽子	長乾頭巾 着附厚板	梨子打鳥帽子	梨子打鳥帽子 扇	梨子打鳥帽子	
白鉢巻 着附厚板 法被 白大口 腰帶 扇指	白鉢巻 着附厚板 法被 半切 縫紋腰帶 太刀	白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 太刀 扇	半切 法被 腰帶 太刀 扇 金地襷	白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 腰帶 太刀 扇	白鉢巻 着附厚板 半切 法被 縫紋腰帶 太刀	白鉢巻 着附厚板 半切 法被 縫紋腰帶 太刀	
(目番二器) 目番五四			曲柄	月	八	季	
等 高 準			替古順	前相模相 上海撰相		所	

シテ立衆
次才上
拍子三合

身シテの捨テ小舟ネうらみても身シテの捨テ小舟ネ
うらみてもカヒあまミや憂世中は
これハ兵衛ヒヤウの佐頼朝スケとハ

七シチ騎キ落オチ

作者不詳

我ガ事コトありキも昨白フ石イシ橋バシ山ヤマの
合ガ新センに身方カタうち負マけ餘りに無ク
勢セにの移ヒトり一まづ安ヤス房ト上ノ総ソウの

方へ開かばやと存じの^{先ラカへ確カリ}いかに去肥
 の決断^{シテ莫平 困カ重シモリ}御前^{ヲオシ}にの^{頼朝 朝カミサラリ}餘りに身方
 を勢^ブにある^{セイ}向^ト。一まづ安房上総の
 方^{カタ}へ開^{ヒラ}かうするに^ヒてあるぞ。急い
 て舟の事^{コト}を^サし付け^シの^ミ入^ル ^{シテウケテ}長^シの
 てる。さくより御舟^{オシ}の事^{コト}を^サし申^ス
 付けて候。急いで召さぬうするに

頼朝 ^{サラリ}

てる ^{頼朝 カツテ}いかに實平 ^{シテウケテ}御前^ニにの
 唯今^{セン}船中^{チウ}に供^ニたる人^ニ救^ユめいか程

頼朝 ^{カケテ確カリ}

あるぞ ^{シテウケテ}いかに七騎^ニは者^ト候
 こそは頼朝^ニまで^ニの八騎^ニより^ハあま

と思^ヒひ出^タたる事^{コト}あり。祖父^{ソノ}為^ニ
 義鎮^{ヨシチン}西^ニへ開^{ヒラ}きし時^{トキ}も主^シ従^{ジュ}八騎^ニ。
 父^{トモ}義朝^{ヨシノ}江州^ニへ落^チち給^ヒしも主

後ハ騎。思入シ不吉フキジの初ハジメなり。実平運ブ

はからひイチニシて船フネより一人ヒトあり。佐へ

長シテウケテつての實平カハル上改テ確カリ佐拍子合承り。舟の

せかいアガよきちりアガより。御供ミツケの人ヒト救シユと

足地サアリ渡せば。まづ一番シテには田代タノ殿

まで二妻ニメには新聞シンブンの次郎ジヤウ又シテ

三番ミツバには土屋ツチヤの三郎ミツロウ又地サアリ四番ヨシバは佐

○小謡

子方遠平チカタトホヒラ

房バウ五妻イヒメにはシテ実平ミツヒラの六妻ムスメには

同ドウじきトホヒラ遠平トホヒラ艦板シテには用カニ確カリ義實ツシヤク

あり拍子合この人コノヒトの君キミのためためこの

人々ヒトトの君キミのためため龍門リウモン原ハラの去サに

屍カバネとハ曝ハクす運ニテサラルも惜しカる上まじ困ま

命イナヒかな中行ユクれ中と撰み出だ上さ上ん上と上き

もの實平ミツヒラ思オモひ中かね中希セ面オモしたる

頼朝詞

ばかりあり^{ナカ}赤面したる^{内丸心}ばかりあり。
 いかに^{運シテ}實平。行^{運シテ}そ^{先ヲカヘ重シモリ}遅^{オソ}きそ^{ヨカダキ}急いで
 あり^{シテウケテ}そ^{先ヲカヘ重シモリ}畏^{シテウケテ}つていかに^{ヨカダキ}固^シ碇^シ殿^シは
 中^シし^シの^シ急^シいで^シ御^{オシ}舟^{フネ}より^シ御^{オシ}あり
 久^{ツレ義実、カケテ}入^シ行^シと^シ早^シに^シ御^{オシ}舟^{フネ}より^シあり^シよと
 ぐや^{シテカケテ確カリ} 女^シか^シあ^シの^シ事^シ 暫^シく^シこの^シ
 御^{オシ}供^{トモ}の内^シに^シ某^{イチ}の^シ老^シ體^シを^シの^シ程^シに^シ

かひがひしく^シ浪^シ用^シは^シも^シ立^シり^シま^シる^シの^シ
 老^シと^シ此^シ度^シト^シ限^シら^シれ^シて^シか^シや^シう^シに^シ
 承^シり^シゆ^シあ^シ。そ^シの^シ依^シに^シ於^シて^シの^シ御^{オシ}舟^{フネ}より^シ
 の^シあ^シり^シ候^シま^シる^シ。い^シか^シら^シわ^シさ^シわ^シう^シの^シ
 儀^シに^シて^シの^シあ^シく^シの^シ。艦^{トモ}板^{イタ}に^シる^シま^シれ^シて^シの^シ
 候^シら^シま^シ。陸^{クガ}の^シ近^シま^シに^シ中^シし^シ候^シ。い^シか^シ
 可^シ詮^{セン}この^シ船^{セン}中^{ナウ}に^シ命^{イノチ}二^{フタ}つ^シ持^シち^シた^シら^シん

1.147246

カ

ずる者と御船よりあろされ入
シテカツテ
 引れぬ思議の事と承つたものか
重シモリ
 な。それ人は生ずるよりの死するまで
 命とば一つこそ持ちてゆ。二つ持
イハレ
 ちたる謂のゆか 義實 サラシメ
 までの命と二つ持ちてゆと。早一
確カリ
 つの命とば我が君に事らせよ。

シテカツテ
 てる。こそそその謂の作 義實 ウケテ
 してゆ。昨日石橋山の合戦は子に
 て作真田の父子義忠の副將軍
 を賜けり。侯野と組んで討たれ
 ぬ。されば親子は一體二つの命あ
ヒラカハ
 らずや。見申せば去肥殿こそこの
 御母に親子一所に渡られゆ。此分
強シニ

踐つて遠平をおろすか。遠平を
 踐つてお分あつたか。親子の内入
 ありられぬ。むにほて作。餘りの
 道理にものおのたまひそ。いかに
 遠平。君よりりの流後ほてあるぞ。
 急らで御母よりありぬ入
 子方サマリ
 何と御母よりありよと。停せぬか

シテカッテ
 女かあかの事急らであり作へ
 子方サマリ
 遠平幼くも。君の御大事に
 立たん事。誰にか方りのべき。御
 母よりありま。く。シテカッテ
 子事とやす者か。君の御為父
 命にてあ。急らで御母よ
 りありぬ。子方サマリ
 子か。君の御為父の

命と背くとも。御よりあり

まづも。言語道断の事と申

すものかな。君の御為父が命と

背くともありまづ。きと申す。お

その儀ならん。手に反掛けまじ

いぞ。習く。これの君の御門出ある

得りたるが實平。行くまでも果

か誤りての可誰ありまじと

申す者とおろさし。果御毎

よりありまうずるはての

申し候。さらば果御毎よりあり

べ。何とありまうずると申すか。

げにげみ。今こそ果が子に候へ

あれと見え。敵大勢討ち出たり。

かまへて果か子と名のつて。壽
 常シヤウに封死ウチせよ。名残心持こそ惜し
 けれ拍子合ハスかくて我か子とおろし置ま。
 實平御舟にまりけり地サラリ
 見ゆる實平かまし。互の心と思ひ
 やり。親子の別れ痛しや子方サラリ
 別は申すに及ばす。君と始め集

○小謡
○独吟

らきて。皆人々に御名残こそ惜し
 うゆへ上チヨの松浦佐用姫伸ビラか拍子合
 松浦佐用姫か唐土舟と慕ひ俺
 びて。渚にひれ伏し有根も今
 遠平か親と子の別トふかからじ
 と。皆涙とぞ流し用ハスける甲契切程
 あまの早舟と暫しとだにも言ひ

あへず跡と見え送りたずあは
 地上^{ササリ}はや遠ざかる浦の波立ち別れ
 ゆくありさまと 餘^{子方}の人ぞ心し
 て 憐^地みあへる 舟の内は 寶平
 のひたすらに 弱^甲氣とんえどとて
 なかあかかへりんおきもせて 心
 強^下くも行く跡に敵大勢^{ホホ}ええた

すそや遠平の討たるとして 頼^{心持}
 朝もあをれみ陸とん給へはさす
 かげ^甲に 恩^ホ愛^ホの契^ホも唯今と限
 りぞと思ひ寶平は磯邊^サに向ひ
 人知れず^甲心のまゝあらはあをれ
 遠平と一^下前に討死せばやとあ
 こがれて 飛^元び立つぞかりに思子^心

の別ぞ哀ありける甲別ぞあはれ乙ありける。

早義盛
セイ上
拍子三合六

引張月の西の空行く定ぬ舟
踏かあ△狂言沖ある波の音までも乙聞
の聲か△狂言し。恐しや△早義盛あれはんえ
たるか△狂言は度舟にてあつげふゆ急い
て舟と傳ぎ△狂言は長つて△早義盛いか

中しゆあれは兵船一艘見えてゆまづ

義実
ササリ

こあたよりの詞とかけゆずるたてゆ
△義実あるべう作いかにあれある舟の

ワキ
ササリ

誰がなされたる御舟にてゆぞ
われもそあたの船影と。怪しく
思ひ休らまあり。そも誰人の舟
やらん△ワキこれは去肥の次郎実平

が乗りたる舟びよ ワキカケテ 何と去肥
 殿の御舟と候や シテカケテ 安かあかの
 事。さそそその御舟のたが召されたる
 御舟にてゆぞ ワキ確カリ こそ和国のふ
 太郎義盛が乗りたる舟びよ シテカケテ
 こそ和国の御舟にて候か ワキウケテ
 安かあかの事。ゆ々中しし通せし

如く御身方にまらしためにこれ
 まぞ集めてゆさそ君のその御舟
 に候候候 シテ用カニ 和国は内々中し合せ
 たる事の由同唯今まらして候
 り安からまらしたはかつて心と候
 するにてもいかに和国殿へ申しゆぞ
 れまぞの御舟まらして候ゆさ

ちから。面目メンボクもあまの事コトのゆヨのノ昨日ケツの
 言コトほどトよりリ神カミが君キミとトん失シひヒや
 しシがやうニにニ浮ウかれレ舟フネとトありテ事コト
 ねネやヤしシ作ツ又マタ何ナニとト君キミのノ御オン
 舟フネにニ浪なみ度タビあまままとトががやや シテウケテ アヒんん作ツ
ワキカシテハ確カリ 言語ゴ道ミチ新ニのノ事コトにニてテゆゆものものののかかあ。
 われ身ミ方カタとト君キミびび出デてテ月ツキ日ヒもも

頼タノシみミなるル頼タノシ朝アサにニのノ離ハナれレ申マシしシこの
 とトはハ命イあありリてテもモ行イかせセんン 運 ン チ ニ テ ウ ケ テ
 自ジ害ガイにニ及ツままんんとト腰ウのノ刀ヤにニ手テとト掛
シテウケテ ワキカシテ アヒんん作ツ
 何ナニとト君キミはハそのその御オン舟フネにニはハ浪なみののゆゆととわ
シテウケテ ワキカシテ アヒんん作ツ
 ああかかああのの事コト シテ ウ ケ テ アヒ ン ン ツ ツ
 にニのの承ウケりリゆゆぞぞ シテ ウ ケ テ アヒ ン ン ツ ツ
 引ヒれレはハ戲シ事コトにニてテ

候。幸陸^{サカヒ}近^{チカ}うのほごに。その舟
 とも寄^ヨせられの御舟^{ミフネ}とも寄
 せ候ひて。陸^{ツガ}にては對面^{ダイメン}あらうす
 るにての^{ワキウチ}心得^{ココロエ}申し候。さらばわが
 て陸^{ツガ}へ来^キらうするにての^{シテ用カニ}いかし
 候。津^ツ前^{ゼン}にて候。我^{ワガ}が君^{キミ}と見
 たりて。今の安堵^{アンブ}仕^シりての^{シテウチ}げに

げにむにて候^{ワキ確カリ}。いかに去^ク肥^ヒ殿^{テン}に申
 し候^{シテウチ}。行事^{コウジ}にてのぞ^{ワキカツテ}。この御供^{ミトモ}
 の内^{ウチ}に行^イとて。舟^{フネ}お息^イ遠^{トウ}平^{ヘイ}は御^ミ
 舟^{フネ}のゆらはぬぞ^{シテカツテ}。その事^{コト}にて候。
 さる謂^{イハレ}あつて。陸^{ツガ}へ疎^ソし置^{オキ}きて候。
^{ワキ用カニ}とくよりかくしやし。度^{タク}くおゆひつ
 れども。政^{セイ}前^{ゼン}某^{ナニ}は心^{ココロ}とつくとせられ

十男

十一

ゆその返報に今までわかきも
やさぬありいで去肥殿に引出物
やさんと隠し置きたる舟感より。

遠平と引きたりて名をせけれど

シテカル上カシテサラフ

ヨクその時實平あまれつ夢が現カ

こはいかにとてええす抱ま付き

位ま居たりたらんへ仙家に入りし

○小話

身の半は合のほぐに立ちか入り七世
の孫に逢み事のたらんも今は知
られたりたらんも今は知られたり。

ミテカ

いかに義盛に申しゆきそこの者をと

は何とて召し連れられたりゆそ

ワキウケテ

おんぼこれまで伴ひ申したる指

を。津前にて申し上げりするはてゆ

シテカッテ

急いで御物語りゆへ 口キ語確カリ 我々も昨日

石橋山の合戦破れ一かば大庭が

手幾君と討ちあらん。大勢諸

に打ち出でたりしに某も一前に

討つて出て一か行と名れつるま

かぬたる若武者一騎ひかたり。某

駒かけをせて見れど浪子息遠平

あり。急ぎ馬より飛んで下り。生

け捕る體にまておし毎底にのせ

中し。これまで休ひ集りたり。なん 先ラカへ

ほう去肥殿に義盛の忠の者にて

ゆぞ シテ困カシ かる有強き事こそゆはね

唯今の御物語と聞きゆひて落

涙はりてゆと。さぞ人々の不覚の

○切迄雜子

後ナシガも思し召すらんざりあからうれ
 一ナシガ位タシガの後タシガのウレうれタシガ位タシガのウレ後タシガのウレ何ナシガか色ウレ
 まん唐衣カク目メも夕暮ツクにありぬれば
 月ツキの盃サカベさうどりサ甲カウ王シテ後カもウレ悦ユキび
ウレのウレ心ココロうれウレまウレ酒宴サケノユヱかなウレいかに實
 平餘ヘイヨのウレにウレめウレてウレたまウレおウレあウレれウレびウレとウレさウレし
 御舞ミマシひウレひウレ入ウレミウレてウレさウレらウレばウレそウレしウレ舞ウレはウレうウレすウレる

田中一因

○仕舞、キリ上

にてゆキリ上心ココロうれウレまウレ酒宴サケノユヱかなウレ男舞オノマシ
 かくキリ上てウレ時トキ白シラをウレめウレぐウレらウレすウレすウレ時トキ
 日ヒとウレめウレぐウレらウレすウレ國クニ々々のウレ兵ヒコ馳カせウレ集ツすウレ
 れウレべウレ程ハジあウレくウレ御ミ機ハシ二十ニジュ萬マン騎キにウレありウレ
 給タマひウレつウレのウレ掌テにウレ治シめウレ給タマへウレるウレこのウレ君キミのウレ
 帝ミカド代ヨのウレめウレてウレたウレまウレのウレ始ハジめウレもウレ實マコト平ヘイ正セイしウレ
 まウレ忠チカ勤クマのウレ道ミチにウレ入ウレるウレ實マコト平ヘイ正セイしウレま

二五七

二五七

忠勤の道は父の如く父の家をてそく久
しけれ。

弱法師

概説

外十三卷ノ二

河内國高安の里に左衛門尉通俊といへる者、人の讒言を信じて一子俊徳丸を
追放せしが、後に其實なきを知りて不憫に思ひ、俊徳丸の二世安樂の為天王寺に
て一七日施行を為しけり。俊徳丸は親の許を離れて悲みの涙に盲目となり、乞食
と落ちぶれて天王寺に來り、施行を受け、るを通俊視て我が子なる事を知り、も
人目もあればとて先づ何氣なく日想觀を拜まゝめに、俊徳丸は感興に乗じて
よろめき歩くを人々弱法師との、り笑ふ。いつか日暮れ夜も更けたれば、名乗
り合ひて連れ立ち歸りけり。

此曲アマリ位ヲ取ラズサレド餘リサラリトスルハ悪シ
小書 盲目之舞

シ テ 高 安 俊 徳	ワ キ 高 安 通 俊	役 別	装 束 附	季	所
面弱法師 黒頭 黒地鉢巻 着附無地縫泊 水衣(地色紺 萌黄 類) 縫紋腰帶 無色黒骨扇指 杖ツキ		着附段敷斗目 素袍上下 小刀 扇		二 月	大段四天三寺
(目番三二畧)目番四		曲柄			
等 高 準		替古順			

ワキ通俊門 確カト雨カニ

弱法師

結寄十郎元雅作

カヤウに依者ハ河内ノ國高安ノ
 里に左衛門ノ尉通俊ト申す者
 にてゆきそも菓子と二人持ちてゆ
 くとさる人の謔言より暮に遊
 ひ失ひて依餘りに不便しの程よ
 二世安樂のため天王寺にて一七日

弱法師

施行セギヤウと引きヒキきキ作シヤク今日コノヒも施行セギヤウと

引ヒキかせカセぞゾやヤとトあアトト作シヤク 狂言カバ

シテ俊徳丸
一セイ上
ヨワク
拍子三合ハス

出デ入イのノ月ツキとト見ミざザればレバ明アキ暮クのノ

夜ヨのノ境カイとトえエぞゾ知チらラぬヌ 難波の

海ウミのノ底ソコひヒあアくク深フカきキ思オモひヒとト人ヒトやヤ

知チるルそれソレ驚オドロク夢ユメのノ衾フシのノ下シタまマのノ立タテ

ちチさサるル思オモとト悲カナシみミ比ヒ目メのノ枕マクラのノ上ウヘにニ

はハ彼カとト隔ヒキつツるル愁ウレヒあアりリ况イハシやヤ心ココロあア

りリ顔オモテあアるル人ヒト同ドウ省シヤウ為カのノ身ミとトあアりリ

てテ憂ウレヒきキ年トシ月ツキのノ流ナガレてテのノ妹イモ背セのノ

山ヤマのノ中ナカにニ落オチつツるル吉ヨシ野ノのノ川カハのノよヨしシ

やヤ世セとト思オモひヒもモ果ハてテぬヌ心ココロかカおオ体タマまマ

一ヒトやヤ前マエ世セよヨ誰タレとトかカ厭イヤひヒけケんン今イマ

ふフ人ヒトのノ後アト言コトにニよヨりリ不フ孝コウのノ罪ツミにニ

蜀六郎

沈む故思の涙かまの曇り。盲目
 とまへあり果て生ともかへぬこの
 世より申有の道迷ふあり
 固よりも心の闇ありぬへ
 傳へ聞く。彼の二の果羅の旅。カ
 のびの果羅の旅。窟道の巻
 とも。此曜の曼荼羅の光。唵。赫

棄てて作末と照し給ひける
 と。かや。今も末世といひながら
 天王寺の石の鳥居。あれや。立
 ち寄りて拜まんいざり寄りて
 拜まん。頃は二月時辰の日。眞は
 時。も長閑ある。日と得て遍ま

貴賤の場は施行をわけて、
 女けりシテに有難き御利益法シテ
 界無邊の御慈悲ごとく、シテ撞と接
 いで群集する。わかれに出でたる
 乞者コウ人のいかにま例の弱法師シテ
 を又われらに名をつけて、皆弱
 法師と作せあるぞやシテけりもこ

の身シテ盲目の足弱車の片輪か
 中シテからより女シテありけりシテ弱法師と
 名つけ給ふシテとわりありシテけり
 云ひ捨つる言の葉までも心あり
 げに圓ゆるぞやまづまづ施行を受
 け給へシテあら有難やシテ儀シテ花の
 香の聞えぬいかにまたこの花散

方ガタにあり作ワを、ワキカウチあうこれあるマカキ離
 の梅ウメの花ハナが弱ヨク法師ハシラが袖スベを散チり
 かるぞとシテウケテ憂ウレたてやナニ難ナニ波ハ
 律リツのまマあアらラべベたタぐグ木キのノ花ハとトそ
 作サせあるルべベまマにニ今イマのノ春ハル邊ヘもモ半ナぞ
 かし梅ウメ花ハナとト抄シヨウつツてテ頭カウチにニ挿サシしシとトふ
 まマざザれレどもモ二ニ月ゲツのノ雪ユキのノ衣イもモ落オつツ

○小謡

ワカル上ウラカシ

中ナカあアらラ面オモ白シロのノ花ハナのノ匂ニホいイらラハハトトワワカカルル上ウラカシ
 花ハナとト袖スベにニ受ウケくれレたタ花ハナもモさサあアらラ
 花ハナのノぞゾとトさサあアらラあアかカなナかカのノ事コト草クサ
 本ホ國クニ土ツチ。素ス皆ミナ法ハフもモ施セ行コウあアれレば
 皆ミナ成ナリ佛ブツのノ大ダイ哀アイ悲ヒもモ伸ノボれレとト
 施セ行コウもモ連ツラナりリてテ我ワとト会カせセ袖スベとト
 廣ヒロげてテ花ハナとトさサあアらラ受ウケるル施セ行コウのノ

馬六甲

色々カラカラの受くるウケル施セのノ色々カラカラにニ自ミ
 ひ来キりリ梅衣ウメノエのノ春ハルあハれレやヤ難ナン
 彼カのノ事コトかカ法ホウあハらラぬヌ遊ユびビ戯シれレ舞マ
 ひヒ謡ユみミ折セるルのノ網コよヨのノ傳ツるルまマまマまマ
 難ナン彼カのノ侮ウぞゾ頼タもモしシまマけケにニやヤ盲マウ
 龜カメのノわワれレらラまマでデ見ミるル心ココロ地チをヲるル梅ウメ
 杖ツヱのノ行ユクのノ春ハルのノ長ナガ閑ヒラけケるル難ナン

○サ由独吟

彼カのノ法ホウよヨもモ傳ツれレどド難ナン彼カのノ法ホウ
 よヨもモ傳ツれレどド難ナン彼カのノ法ホウよヨもモ傳ツれレどド難ナン
 雲クモよヨ隠カれレ急ジツ尊ソノのノ出シツ立ツ遠ハルにニ
 三サン會エのノ曉トウ未ミだダありリ。風カゼるルてテこのノ
 中ナカ向ムカふフ於オりリてテ行ユクとト心ココロとト延ヒをヲ入イれルまマしシ。
 同ドウササリリメ
 そソにニよヨつツてテ上ウ宮ミヤ太タイ子シ。國クニ家カとト改カめメ
 万マン民ミンとト教キョウへヘ佛ブツ法ホフ流リウ布フのノ世セとトあアりリてテ

普く惠を弘め給ふシテ中用カニシ 然れば當
 寺と法建立ありて始めて僧尼
 の法と顯しクセ中用カニ粘ラズ様 曰天王寺と名づけ
 給ふ拍まき 金堂の法本尊ハカ 如意輪の
 佛像救世觀音とも申すとか太子
 の御前生震且國の思禪解よて
 渡らせ給ふ故あり出離 の佛像よ

應トつイ 今日域よ至るまで甲 佛法
 最初の法本尊と顯れ給ふ御威
 光の真あるかあや末世相惠の
 御誓チ 然るて當寺の佛圖の法
 作の品々もヤ 兼梅檀の靈木にて
 塔カ 婆の金寶イ 至るまで中 筒浮檀金
 ありとかカ 萬カ 作イ するあるカ 龜井の

水までも水上清き西天の無熱
 池の池水と受けつきて流久し
 三行々までも五濁の入向と道すま
 甲。濟度の舟とも寄するある難
 彼の寺の鐘の聲異浦々に響き
 来て。普きおき満朝のまおし照る
 海山も皆成佛の波あり。

あらし思議やこれある者よよく
 よくさる入づ。某が追ひ失ひし子に
 て作らしかよ。思のあまうりは盲目
 とありてひあらし不使と衰へて依
 ものかお人目もさすかにはい入む
 夜に入つて暮しく名告り。高安へ
 連れて帰らざらやとぬづゆやあ

いかに日想観をも拜み入シテウケテげよ
日慈観の時シあるべし。盲目を
れどもそなたこそふかりカレ上心ありある
日に向ひて東門トモを拜み南無阿弥
陀佛フツ何東門トモとイハレ得あやさし西
門石の鳥居トリノイよシテ用カニあら愚や天
王寺の西門サイを出て極樂の東門

又向みの倅事ヒガかワキカレげは朗カニげよそと
難波の寺の西門サイを出づる石の鳥居
阿字門シよ入つて阿字門ワキを出づる
彌陀の所國も極樂の東門シテ大ニ用カニ
向み難波の西の海ウミ入日の影カク
も舞マユをかやシテ用カニあら面白オモシロわれ盲目
目とあらシ前サキの彌陀師ヨロが

○狂言雑子

西

乙

常に見馴れし境界あれは何
 疑も難彼江よ江月照し松風
 吹まゝ永夜の清音何のあす前
 ぞや伊豆修吉の松の隙より眺むれば
 月中落ちかゝる淡路磯山と眺め
 入日や落ちかゝるらん日想観
 ○仕舞
 地中ツケサ 元竹 竹下甲 竹中 持シ
 中 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

あれは曇りも彼の淡路繪碁須
 磨り石記の海までも見えたり
 見えたり 満目青山の心よあり
 地上 元竹 竹下甲 竹中 持シ
 シテ 用カニ
 南はさこそと夕波の修吉の松影
 東の方以時を得て 春の緑の
 地上 元竹 竹下甲 竹中 持シ
 シテ 用カニ
 地上 元竹 竹下甲 竹中 持シ
 シテ 用カニ

草香山 クサヤマ

地北はいつく チホクハイツク

難波 ナニワ

長橋 ナガハシ

の橋の徳 ノハシノトク

また また

とありく移す トアリクシユス

貴縣の人 キケンノヒト

難波江の ナニワエノ

是も ココロモ

と ト

の ノ

笑 ウツク

ひ ヒ

給 タマフ

み ミ

ぞ ソ

や ヤ

思 オモフ

入 イル

は ハ

上

サ

カ

キ

ヒ

ト

ハ

ノ

シ

セ

テ

ニ

シ

テ

ハ

シ

テ

シテ

ト

サ

シ

テ

ハ

ノ

シ

セ

テ

ニ

シ

テ

ハ

シ

テ

ハ

シ

地上^{チノサリ}の^{シテ}焼^{カケテ}く^サや^シわれ^シこそ^シは^シ父^シ高^シ
安^シの^シ通^シ俊^シよ^シも^シ通^シ俊^シの^シ我^シが^シ
父^シの^シそ^シの^シ御^シ聲^シと^シ聞^シく^シよ^シり^シも^シ
胸^シう^シち^シ騒^シぎ^シあ^シき^シれ^シつ^シこ^シの^シ夢^シ
か^シして^シ後^シ徳^シは^シ親^シ女^シか^シら^シ飛^シ
し^シと^シて^シあ^シら^シぬ^シ方^シへ^シ逃^シげ^シ行^シけ^シば^シ
父^シの^シ追^シひ^シつ^シき^シ手^シを^シ取^シり^シて^シ何^シと^シ

か^シつ^シむ^シ難^シ波^シ寺^シの^シ鐘^シの^シ聲^シも^シ夜^シ
ま^シぎ^シれ^シよ^シ切^シけ^シぬ^シさ^シき^シあ^シい^シぶ^シ
あ^シひ^シて^シ高^シ安^シの^シ里^シに^シ歸^シり^シけ^シり^シ
高^シ安^シの^シ里^シに^シ歸^シり^シけ^シり^シ

高安の里

高安の里

絃 上 概 説

外十三卷ノ三

太政大臣藤原師長、琵琶の奥秘を極めん為め渡唐せんとして途すがら須磨の塩屋に宿りけるに、主の老夫婦は師長の琵琶に堪能なる由を聞き、知れるものとして一曲を所望しぬ。師長請にまかせて弾しけるに、俄に村雨の降り來りしかば、翁は苦を取出して板屋を葺き、琵琶の調子は黄鐘、雨の音は盤渉なれば、今こそ一調子になりしと言ふ。師長た、人ならしと思ひ、琵琶を渡して一曲を彈せしめけるに、妙技神に入れるより渡唐を思ひ止り、其名を尋ねれば村上天皇女御夫婦なりとて安を隱せしが、や、ありて天皇現れ給ひ、龍王に教して琵琶の名器獅子丸を召し出させ、秘曲を師長に傳へ給ひけりとぞ。

此曲位モ輕カラズ緩急モ亦多シ能ク具合ヲ考ヘテ諡フベシ
小書 宛 脇能之式

ツレ	龍 <small>(龍神)</small>	面黒髭 赤頭 龍戴 赤地金紋鉢卷 着附段厚板 法被 赤地半切紋付腰帶 打杖持 琵琶持	後シテ	村上天皇	面中將 初冠(纒) 着附赤地縫箔 單狩衣 込大口 差貫 腰帶	ツレ	姫	面焼 姓髪 無色髪帶 着附摺箔 無色唐織 綾水衣	ワキ	師長從者	着附厚板 白大口 法被 腰帶 太刀 扇	ツレ	藤原師長	風折烏帽子 着附厚板 白大口 單狩衣又長絹 縫紋腰帶 神扇	役別	装束附	季	所
ワキ	師長從者	着附無地熨斗目 素袍上下 小刀 扇	ワキ	師長從者二人	面笑尉又朝倉尉ニモ 尉髪 着附無地熨斗目又小格子厚板ニモ 姓茶水衣 緞子腰帶 腰蓑 耐扇指 田子持	曲柄	月	八	浦磨須都摩武岡津攝	能脇器)	目番五	督古順	等	高	準	所		

絃上

金剛孫五郎作

早男立衆 朗(三)師長諡(三)
次亦上

拍子ニ合

八重の舟路をゆく舟の八重の
舟路をゆく舟の唐土のいつくある
らん 師長(三) 兩カニ
長とはわが事なり 師長(三) 兩カニ
君天下に隠れあひ琵琶の御上
手にては唐の御上

絃上

ト

ますすよりのこの度思しるるなり
道すから名所の月々もは繁んせん
ために唯今津の玉須磨の浦に
御下向にてい師長サシ上 用カわれゆきていつの
夕と都の空まだ夜深まよ格立
ちてまにんえたる山崎も過ぐ
れを後にちやありて早立衆 上 拍子合波てす袖の

湊川波てす袖の湊川また知ら
ぬ方にもわれは生田の伸りき月
の木の向にて甲 元心筑紫の格の道
されどもこれの唐土の門出と思
む勇ある。鳥の林とよそに見
て。須磨の浦にも善きたけり
須磨の浦にも着きたけり

法上

上

早月ツキノハヤシ

御ミ急イジぎカのイ程シにレたレのカや津の國

須ス磨マの浦にレ御ミ恙ツきたレてハ暫シくテ

の前にレ御ミ休ヤみアりコトノ由ユ々モ

御ミ尋タねツあらうすにレ依ツ

シテ射三人上
ツレ姉
一セイ
拍子三合ハズ

持テらカぬル夕シ汲クむ桶の苦々キはヨ

又マカツく考の杖 松ツま業と須

磨マの浦 眺ノに憂子ヤ忘スらん

シテサシ上
新ハ朗カニ

面オ白シや浦子入日は海上に深須

磨マや明るの浦のさま塩焼く延

の心にもさも面白う作あり

南ミと遠に眺むれば雲に續ける

紀キの路の小嶋由良の戸渡る

そや舟も夕追風の吹上や

遠ツ浦カら任音の松をそスめれ

海越シテに 富ト嶋カニの磯イソや 昆陽クニヤウ 陸リク 彼カニ
 名ナに 繪エ 嶋トと云イひあアらラいイかカて
 か筆ヒツにもモ及ツぶブまマ あアらラ面オモ白シロのノ
 浦ウラの景ケイ色シキやヤ げゲにニやヤ面オモ白シロまマいイ延ノ虫ムシ
 の磯イソ屋ヤとトやヤ 淡タン路ロ嶋ト阿ア波ハ仲チウ舟フネのノ
 僧ソウぎギのノ来キるルはハ雨アメこコさサめメれレ今イマ一ヒト返ヘリ
 もモ 汐シ汲クめメやヤ人ヒト々々 上ウ手テ月ツキ朗朗かカササリリ
用ル心 サハ キ切 ヤハ

奥ウチのノ 赤アカそソよヨやヤ 陸リク 奥ウチのノ 千チ賀カのノ 塩シホ
 竈カマドのノ 名ナのノ みミあアそソ 遠トホけケれレむムいイかカ
 運ウツばバんン 伊イ勢セ嶋トやヤ 阿ア波ハ 僧ソウがガ 浦ウラのノ
 夕ユフとトべベ度タク重チカねネてテもモ 汲クみミ難ガタしシ
 田タ子コのノ 浦ウラのノ 汐シとト べベいイさサ下ゲりリたタんン
 わワくクらラぬヌはハ 訪ヒツみミ人ヒトあアらラばバ 他タとト
 登トへヘてテこコのノ 須ス磨マのノ 浦ウラのノ 汐シ汲クまマんン
法上

須磨の浦のゆゑに。塩屋に
 歸り休まらざるに。塩屋の
 主の歸りての御宿と借らばやと
 存じぬ。いかんかあるは塩屋の主
 にてあるか。塩屋の主にて
 引れはは産ののち政大臣所長公と
 中して天下に隠れまゝまゝぬ疑
 中して天下に隠れまゝまゝぬ疑

翌の御上りにて作か。入唐の
 御望にてこの浦に御下向にて
 一夜のお宿と慕らせ作へ。わ
 やうのへにて産ののち異浦にて
 御宿と慕らせ作へ。あら何ともあわ
 ぬ彼わたりにてこそ異浦あんと
 中すべければこれ須磨の浦まで

なまのまのまの御宿とまらさせ候へ
シテ用カニ
 見ミ苦クくくもさらば御宿とま
ツレカニ上サテラフ
 らせりべ一トトセ されば一年雨の祈の御
 時ト神シ泉イ菟ウにニてテ琵琶ヒのノ秘ヒ曲クと
 遊ユばバふフねネかカばバ 龍リウ神シンもモめメてテける
 にニやヤさサもモのノ晴ハ天テン俄ニにニ曇クモりリ天テン
大キク確カリ
 雨アメ降フるル事コト終ハ白クそれレよりシしてテこの
カル中抑テ用カニ

シテ二人
 君キミとト雨アメのノ大オホ屋ヤとト中ナカすスとトカカやヤかカまマど
 やヤどドとトあアまマいイこのノ君キミにニ一ヒト夜ヨのおノ宿ヤドとト糸イト
 らラせてテ 秘ヒ曲クとトもモ 聽キ聞クすスあアらラば
シテ
 例レイあアまマいイ思オモ出デ
トあアのノササララッットト連連シシテ
拍子合カ
 葉ハ屋ヤにニてテ琵琶ヒとト弾ヒきキ給タマひヒらラこの
トあアのノササララッットト
 君キミのノ須ス磨マのノ塩シ屋ヤ露ロもモたタまマらラぬヌ軒ケンの
 板イ間マ遇ユひヒ磁チまマのノ砌セにニ逢アひヒぞゾ嬉ヒしシかりリ
用カニ

左

ト

けり上。里朝カニサリ離れ須磨の家ニ居の習ニと
 て切須磨の家ニ居の習ニとて行事トと
 松の柱カツラや竹タケあめる垣ニの重ニにて成も
 たまらト痛イしヤ海ウのウ少ニしコ遠ニけれ
 どもカ彼ニたニごトもトてテ聞イえキてイつトの
 まトもト夢トもトもトはト解トゆトまトよトしトよトし
 それトもト御ト琴ト琴トとト寝トられトぬトまトにト遊ト

ばトせトやトわれトらトもト聽ト聞トすトべトわれトも
 聽ト聞トすトさトんト。いトかトにトしトよトげトゆト夜トも
 すトからト御ト琴ト琴トとト遊トばトされトゆトこトの
 須磨の卷トの春トかトしトよト保ト氏トこトのト浦トに
 後トされト給トひト初トめトてト夢トのト味トのト辛トまト
 とト知トるトとトらトんトどトもトまトだトゆトじトまトぬト旅ト衣ト
 位トくトはトかりトあトるト後トのト露トのト玉トのト結ト琴ト

を弾き鳴し。喜びわびて泣く音は
 まがみ浦波の思ひ方より風や吹く
 らん。それの浦波の音通みらしは琴
 の音の音通みらしは琴の音の音の音
 れの弾く琵琶の音の音の音の音の音
 村雨の古屋の軒の板庇目見え
 す程の夜雨や管絃の障あらん

シテカサテ 雨カニ

何ぞ御琵琶を遊ばしめ
 られてゆぞ

シテカサテ

けに村雨の降りゆぞわらかに
 若取し出し久し
 びてゆらん
 暮に板屋を暮
 き渡し。静に聴聞しよと

シテ入上用カニ 祖ホ父ダとハ姪ハはハ諸モ共ニにツレ 咎ト取リ出シ
拍子合ハズ シテ 五ツレ 葺キきハ 塩シ竈カのノ名ナのノ近チカ々ト
拍子合 寧ヨりハ居ルつク。身ミとトそノはハだテてハ聞クきハ右ミ
甲 左サりハいカにハ主ヌ。カハ序シとト傳ワらズるハ板イ
 屋ヤのノよシとト。行ユくハ苦クにテ葺キきテあ
 るゾ。シテ用カニ 五ツレ 今イマ遊アソばレいハ琵琶ヒ
 のノ御ミ個コ子シはハ焚ク鐘シ。板イ屋ヤとト敲クくハ雨アメ

のノ音ネのノ盤バン床シにテいハ程ハにテ苦クにテ板イ屋ヤ
 とト葺キきハ際ハ。今イマこノそノ調テウ子シにハりテ
拍子合 いハへハいハれハなハとトそノ始ハジめメよリ。常トコ人ヒトが
 らズ思オモひハいハにハいハくハ。やハ琵琶ヒ琴シ
 をトいハかテ弾ヒかテあルべシまシ。甲用カニ 雨アメからハ
 江カのノほソらリ。岩イ越ツすハ彼カのノ弾ヒまシや
 せんハ琵琶ヒ琴シのノ思オモひハもトよシらメぬハ説ワ

弦上

乙

あり、^{地サリ}思ひよらずも琴の音の押して
 お琵琶と賜りて、^{シテ中用メ}おぼちの琵琶と
 調むれば、^{心持シ}焼は琴柱と立て並べて
 撥音爪音をさらり心からり心からりばら
 りと感後もほれきのもどとる
 はかりありや弾いたり弾いたり面白わ
 師長思みやう。師長思みやう。われ

日の本にて琵琶の奥儀と極めつ
 大國と窺をんし。思ひし事の
 清まらさやまのあたりから堪能
 ありける事、又前珍渡唐と留まら
 んし。思ひて塩屋と出て珍へばそれ
 とも知らず琵琶の心一つのた
 一あみあて。趣天樂の唱歌の聲

玄一

上ヒラ及カ別ニ出シ閉カニ梅カ枝ハにテそノ鶯ノ巢ヲとク入リ風吹カハ
 いカてセん夜に宿る鶯宿人の帰るル
 とも知らズて弾いたリ琵琶ヲ弾ク一ツ
 上ヒラカツテ 行旅人ノ御立ちらひヨ
 御立ちらひトや行とテ留め中ノさぬ
 ぞと祖父と姪はまりより
 琵琶ヲ弾クよりも御袖とたり引け
ヨウク拍子三合 シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ
ヨウク拍子三合 シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ
ヨウク拍子三合 シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ

○切逆雜子

や引けや横雲の夜のまだ深く浦
 の名の時かシてお立ちらひに入りし
 に留め給みらんまづこの度の帰路ヲ
 して重ねて尋ねたすべし御名と
 名告り給へや今今の行をか色むむべ
 まわれ絃上ノ主たりしし村上の
 天皇梨之實の女所妻婦あり
シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ
シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ
シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ
シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ シテ上ヒラサラリ

上開カニ月トルニ

御身ミミの入ノ唐留トクめんだめ。夢ユメ申マシにま

みえ須磨スモの浦ウラ故院コインの昔コトの夢ユメの告ツケ

思オモひ出デてよ入ノかき清スすやうに

失ウシせ終ハシみかき清スすやうに失ウシせ終ハシみ中入来席間

引ヒキもそもこれノ延喜エンキ聖代セイダイの御ミコ儀ギ

村ムラよの天アメ皇ミコとハはわが事コトなり。その

聖代セイダイの御ミコ儀ギなり。唐トク土ツチより三

後三村上天皇上
拍子二合ハ六
出端

早ハヤ笛フエ上ノ月ツキ
進マシ早ハヤシ

丸マル浮ウキみとハんンえエかカはハ八ハチ大ダイ龍リウ女ニョと

獅子シシ丸マル浮ウキみとハんンえエかカはハ獅子シシ

黒クロの龍リウ神カミ造ツクリ小コ圓マダラけ。獅子シシ丸マル持テ集ツク位イれ

んンとト漫マン々ゾクたるタるル海ウミ上ノにニ向ムクひヒいイかカ下ゲ

へヘ飛トビられレとトらラでデるル出デしシ弾ダンかせ

面オモテのノ琴コト瑟シとト渡ワタるル。弦ゲン上ノ青アヲ山ヤマ獅シ

子コ丸マルこれレありリ。さサるル程ほどにニ獅シ子シのノ龍リウ宮キヤウ

去上

ト

引き連れ引き連れカノの御琵琶と
 授け給へハ師長賜り弾きあらし
 父龍王もシテ弦管の役々或ハ彼の
 被と打てば或ハ琵琶の静メ名よし員
 小獅子園カサ乱旋カサに村上の早笛天皇も
 奏カサで鈴カサ面白カサかりける早笛秘曲カサあり早笛
シテ中獅子カサにハ文殊カサや早笛るららん獅子カサにハ

文殊カサや早笛るららん早笛帝カサハ花カサの車
 へカサ糸カサハ大龍カサ女カサにカサ引カサかれ給へば
 師長も花馬カサにカサ鞭カサとカサおカサちカサ馬カサ上カサに
 琵琶カサとカサ携カサへて馬カサ上カサに琵琶カサとカサ携
 へて須磨カサの帰カサ途カサそ有カサ強カサき。



著權所司
類不許

大正拾年三月十日印刷
同年三月十五日發行

訂正著作者

廿四世

觀世元滋

京都市上京區三條通麩屋町東北角

發行兼

檜常之助

京都市神田區錦町二丁目拾番地

發行所

檜大瓜

東京市四谷區傳馬町貳丁目

印刷所

江川堂



終

